

11. トルコギキョウ

・殺菌剤

FRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
10+1	ゲッター水和剤	散布	-	5回以内	花き類・観葉植物(ひまわり、ゼラニウムを除く)
9	フルピカフロアブル	散布	発病初期	5回以内	花き類・観葉植物(ばら、スターチス、宿根かすみそう、ゆり、りんどうを除く)
19	ポリオキシシリンAL水溶剤	散布	発病初期	8回以内	花き類・観葉植物

・殺虫剤

IRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
21	ダニトロンフロアブル	散布	発生初期	1回	花き類・観葉植物
21	ピラニカEW	散布	発生初期	1回	花き類・観葉植物(カーネーション、きくを除く)

・殺虫剤(参考農薬)

IRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
1	オルトラン粒剤	株元散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物(きく、宿根スターチス、カーネーション、アリウム、たであいを除く)
	オルトラン水和剤	散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物
18	ロムダンフロアブル	散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物(きくを除く)

注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決めているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。

注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける(「薬剤抵抗性管理」参照)。

注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

注4) 蚕毒・魚毒については、「28. 花き類の総括注意」も参照する。

病害虫名 (F: 菌類病、B: 細菌病、V: ウイルス病、O: その他の病原体)

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
立 枯 病 (F)	定 植 前	1. 多発ほ場では連作しない。 2. 発病ほ場では土壌消毒を徹底する。 3. 発病株を認めた場合は、直ちに罹病株を除去し、ほ場外に埋却する。	1. 本病は土壌伝染性の難防除病害である。 2. 過湿にならないように注意する。
モザイク病 (V)	生 育 期 間	1. ウイルス感染苗による伝播は広範囲に及ぶため、育苗時の感染に厳重に注意する。 2. アブラムシ類防除のため、「25. 花き類・観葉植物」の項を参考に、定期的に殺虫剤を散布する。 3. ハウス周辺の雑草は伝染源になるので定期的に除草する。 4. 罹病株から順次二次伝染が起こるので、発病株は早期に抜き取り、ほ場外に埋却する。	1. 病原ウイルスにはCMV、BYMV、C1YV、BBWV-2など知られているが、全てアブラムシ類により媒介される。 2. アブラムシ類の徹底防除が重要である。
黄化えそ病 (TSWV) えそ斑紋病 (INSV) えそ輪紋病 (IYSV) (V)	植 付 前 生 育 期 間	1. ウイルス感染苗による伝播は広範囲に及ぶため、育苗時の感染に厳重に注意する。 1. アザミウマ類の飛来・増殖を徹底的に阻止する。ハウスの開口部を防虫ネット(0.4mm間合い)で被覆すると侵入を軽減できる。 2. アザミウマ類の項、又は「25. 花き類・観葉植物」の項を参考に、殺虫剤を定期的に散布する。 3. ハウス周辺の雑草は伝染源になるので定期的に除草する。 4. 罹病株から順次二次伝染が起こるので、発病株は早期に抜き取り、ほ場外に埋却する。	1. 本ウイルスは、アザミウマ類により伝搬されるので、アザミウマ類の徹底防除が重要である。 2. いずれのウイルスも、簡易診断キットが市販されている。それらを用いて診断が可能である。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
えそ萎縮病 (V)	植 付 前	1. 病原ウイルスは、トルコギキョウ以外ではほとんど問題とならないので、発生ほ場では作付け品目を変える。 2. 病原ウイルスは、土壌中において罹病残渣や雑草等の根部でウイルス粒子のまま生存しているため、栽培終了後は土壌中の作物根部をできる限り除去する。 3. 病原ウイルスのトルコギキョウえそ萎縮ウイルスは、50℃以上の高温に7時間以上遭遇するとウイルス活性が低下するため、熱水土壌消毒は本病の防除に有効である。	1. 本ウイルス病の発病適温は22.5℃付近であり、本県内では抑制作型よりも5～6月収穫の促成栽培作型で発病が多いので、土壌消毒の実施に当たっては、処理時期を考慮する。 2. 病原ウイルスは、媒介者を要しない物理的な接触伝染により土壌伝染する。
灰色かび病 (F)	生 育 期 間	1. 施設内が過湿にならないよう密植を避け、換気を図る。 2. 株元の枯死葉は伝染源になるので除去する。 3. 発病を見たら、直ちに罹病部を除去し、薬剤を散布する。 4. ゲッター水和剤1,000倍液、フルピカフロアブル2,000～3,000倍液、ポリオキシソルボン水溶剤2,500倍液のいずれかを散布する。 5. 除湿機を利用すると発病軽減できる。ただし、除湿器のみでは完全な防除は困難である。薬剤を併用すると散布回数の削減と防除が可能である。	1. 薬剤だけによる防除は困難であるので、耕種的防除をできるだけ実施する。 2. 除湿機を利用する場合の注意事項を参照する。立枯性症状の発病に対する効果はやや劣るので、薬剤散布は株元を中心に行う。
ハダニ類	生 育 期 間	1. 発生初期に、ダニトロンフロアブル、又はピラニカEWの2,000倍液を散布する。	1. ダニトロンは魚毒に注意する。
アザミウマ類 (ウイルス媒介)	生 育 期 間	1. 施設の開口部を防虫ネット(0.4mm目合い)で被覆すると、侵入を抑制することができる。 2. 施設周辺の雑草が発生源となっていることが多いので、除草管理を行う。 [参考農薬] 1. オルトラン粒剤を10a当り3～6kg株元散布する。 2. オルトラン水和剤1,000倍液を散布する。	
シロイチ モジヨトウ	生 育 期 間	1. 施設の開口部を防虫ネットで被覆すると成虫の侵入を抑制できる。 [参考農薬] 1. ロムダンフロアブル1,000倍液を散布する。	1. ロムダンは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。